八大山人の贋作

金岡酉三遺作
林宏作校閲

はじめに

この世に在るものの滅び行く速やかさは恐るべきものだ。歴代の名画記や各時代の書画録の類を繙く時、そこに記された画跡や、数しれぬ諸多の作家のむなしき羅列に、如何ともしがたきもどかしさを覚える。

厳しい折磨を経て、現代僅かに残った作品に対して、その時代それぞれに止揚された内在の素晴らしさには感歎の想いが尽きない。それがたまたま後世の模本であった場合にも、稚拙な技法にあきたらずを思いつつ、参考資料として人寰に残存した貴重さに、珍重の想いに浸るのである。

かつて永泰公主の墓が発掘され、そこに描かれてあった壁画が発表された時、その素晴らしい描写に、当時かくま

でにすぐれた人がいたのかと思った。その名は分からなくとも、その出来栄えの美しさ、技法の高さに心より敬慕し感歎したことである。かく高貴の人の墓壁画を手掛けた人は、必ず当代の有名な人であったに相違あるまい。とにかく、この壁画は幸いにも土中に埋めてあった故に、後世に生々としたものを伝え得たのである。観者は、今日のために存在したかの如き画中の人々がいまにも墓中から歩み出るような、そんな錯覚すら抱くのである。これがもし紙上に描かれてあったとしたら、恐らくは久しからぬ年月の間にとっくに佚亡していたことであろう。

たまたま私が弱年の頃に興味を抱き、それが終生の研究のテーマにならんとしているわが八大山人への企求は、年月を経るにつれてつくづくと感ずることはその作品の湮滅の速さである。真跡はあまりにも少ない。仮冒する作品の横行が甚しい。さすればこそ、残存するものに対して抱く敬愛の念は深まり行くのである。

山人が一七〇五年にこの世を去ってから、すでに三百余年の歳月がたった。現在その名声は天下に遍く、画史の上ではその評価が定まっている。それにも拘らず、その作品の全貌については、贋作が多々存在するという事実がその真価を曖昧なものとし、玉石混淆した状況のままに放置されている。八大山人のみならず、ひいては石涛までもが鑑賞が非常にむずかしいものだと、心ある人はむしろ避けて通る分野にすらなっている。

もとより真筆というものは、数として決して希望者の要望に答え得るものではない。まして八大山人の場合は、その画業の真価はむしろ没後において揚州八怪などの新しい風潮の画人によって承け継がれ、漸次に著名の度を増した。その作品はそのときにはすでに傷み廃れたものが多くなり、湮滅し去った後、時代を追って高まる要望にしたがって、巧拙それぞれの贋作が制作され横行したようである。

その反面、真作が認められることも奇妙に少なくて、正当な扱いをうけずに、粗末にされたという事実もあったのではないかとも考えられる。

しかしながら、八大山人の事迹とか画業は、現在あまたの研究者の熱心な探究により、その実相の究明はほぼ完成したように思われる。さすがに中国は典籍や記録に驚歎すべき奥行きをもった国である。そうした夥しい文献の中から金を淘るような作業がつづけられ、生没など年代も明らかになり、編年のための正確な基準が解明されつつある。

かくして、私どもは研究の緒にようやく辿りつくことが出来た。そうした成果に照り出して見て、過去に出版された多数の画集は、作者の実像を知るための尊い資料である。真偽・辨別の根拠、或いは基準として重要な存在であるとそれ等は考えられていたにも拘らず、多くの偽物が混在し、ひいてはそれが如何に正当な印象の把握を妨げていたかということを痛感させられる。

彼は五十五歳頃から八十歳頃に至る二十五年間、「八大山人」と称して翰墨生活に入っていた。張庚の『画徵録』では「隠於書画」といっているが、それが現在遺存されている主要な作品が制作された期間である。

その間における落款様式の変化・使用印章の種類・画風とか書癖の推移、そうしたものが現在実に明瞭に解明されるに至った。真贋の基準は的確に分かるようになっている。それ故に戦前に真筆として賞揚された作品でも、はっきりといけないとされるに至ったものもある。

又それとは反対に、八大山人と称さなかった頃、いわゆる早期の作品が思いがけないところに存在していたことが分かって来た。今まで無いとされていた台湾の故宮博物院の襲蔵の中に、愛すべき壮年期の画冊があった。《傳綮写生冊》がそれである。彼が傳綮と称した僧籍の時代、三十四歳の作品である。これは実に珍重すべきもので、前にもなく、又後にも二十年の空白期間を控える、実に孤壁なのである。

晩年或いは没後に有名になった人の作品は、若い頃のものは実に稀少だということを痛感する。無名の人の作品は粗末にされ、やがて有名になり人が競って捜し出す頃にはすでに地上から姿を消してしまうからであろう。珍らしく

も、この《傳縈写生冊》は乾隆帝以降の各皇帝の御覧になり、秘庫に入って今に至り発見されるまで静かに眠っていたのである。

こうして書き出して見たのは、つね日頃から八大山人の偽物はどうして作られて来たかについて考え、ひいてはその反証なる真跡のことも考えて来たよすがに、何かをまとめて見たいと思ったからである。取るに足らない偽物は紙筆につくせぬほどにある。しかし画集などに入り、真跡に雁行した偽跡には考うべき多くのものがある。

よく売れる作家の作は、実に厖大な偽作の種本になる。八大山人とならび称せられて名声を得た石涛などは、その後に続く偽跡の数は慧星の尾の如く宇宙に漭漫している。それ故に石涛の作品の真正な編年はいまだに明確にされていない。数点の牢固たる評価をもった作品は存在しているが、余りにも多くの作品が曖昧とした状況にある。又所有者の手前を考慮したりして、あるものは断定も下し得ず、なお混乱の状態にある。容易に手を付けられないとされている分野の一つでもある。

八大山人の技法は石涛に異なり、その筆勢のすばらしさは容易に模倣することができないであろう。たとい仿作があったとしても、必ずや辨別に容易であろうと思っていた。しかし作品を一堂に会することの不可能な性質上、歴世の巧者によって見事な偽作の世界が展開している事実に逢着するとき、その謎の穴の深きを覚えるのはやはり石涛に異ならないのである。

写真と印刷の発達は審定や編年のために実に有意義な効果を発揮した。昔は大むね勘によって鑑定した。その人が蓄積した経験にもとづいた勘によって判定された。それ故、真跡の確たる根拠がなければ、それは盲人が盲人を導くようなものであった。写真術が美術の世界に応用され、その欠点を補ってくれたことは実に有意義であって、それを措いては何も行い得ない。

八大山人にはその技法と気韻に、他人が模倣し得ないものがあるのは勿論であるが、印章にもはっきりした特徴が備わっていて、完全な模作はできない実証性をもっている。写真はそれをよく解明してくれる。

しかしながら、永い年月に行われて来た贋作は、年代が下るにつれて、実に巧妙になった。殆んど分からないほどに程度の高いものが沢山にある。それには、写真が真実の解明に寄与した反面、偽作の道具に使われた事実も考えねばならないことを教える。未だに写真が行われず、発明されても普及しなかった旧時代に行われた偽作は、作風が似ても似つかぬものであった場合があったばかりでなく、それに使用された印章も決して精密ではない。それだけに用意するところがないから、すぐに看破される。印刷物となって普及した山人の作品は、模写され、比較的安易な偽作の資料となり、乱真の具とはなった。

もう一歩進めて、写真によって複製された印章というものは、はたして真に人を最後まで欺くに足る印章たり得るのか否か。それは不可能であるといわねばならない。本物の印章を抜型にして作れば、或いは可能かもしれない。しかし一度押された印影から撮られたものは、余程に淡く平明に押捺された場合のほかには、印肉のダブリがあり、それから複写された印形は必ず些少の太りを帯びるであろう。その厘毫の差といえど、見る人には必ず疑問を抱かせずにはおかない。加圧によって生じたマジナールゾーンが偽印には再生されていて、真印のシャープさを失わせる。そこがまた、我々が写真による鑑識の功用に恩恵を受けるところでもある。

木印で偽印が作られた場合にはもっとはっきりする。木の風合が出るばかりでなく、却って精緻さを欠くのである。模糊として書き版によるものではないかと思われるものすらある。いずれにしても真印にはほど遠く、久して熟視すれば、真偽は自ら分かるものである。

☆　☆　☆　☆

作品の流転に想いを馳せる時、絵はそれ自体が湮滅の宿命の上にあることに、今更ながら思い到る。志して一作家の研究をなさんと思い立つ時、荒野に亡羊を求めて行くような、本当に茫洋とした思いに立ち到る。

本来、書とか絵は、多くこれを求める人のために作られるものであれば、作者の手元を離れた作品はその時の限りに散って行く。珍重する人の手を借りて、自ら足を帯びたように、千里万里の果に流れ去る。

山人が終生使った、あの〔八大山人〕という白文印が、たしかこのあたりから初めて押捺されたであろうと思われる甲子（一六八四）の年記がある、山人五十九歳の頃の画冊が見い出された。遥か波涛を越えたシンガポールの画家陳文希氏の蔵品である。陳氏はまた世界画廊という、極く普通の画廊の経営もしている。いかがわしいものの流れている世界に、こうした珍奇な作品の出現は、実にうれしい限りである。それは祖先が中国本土から齎らし来り、久しい以前から蔵の中に秘蔵されていたものだそうだ。その発見をよろこぶとともに、書画の運命について改めて考えさせられる。

☆　☆　☆　☆

八大山人や石涛の作品の探求とか、ひいては偽物問題のことを考える時、近時誰れしもが張大千のことを語る。彼の芸術については、棺を覆うのを俟たねばならぬが、彼が明清の際における遺民画家の芸術の真価を見出し顕彰に努めた功績は、その乱真の事実とは別に特記されねばならない。八大山人の身上を正し、作品の価値を明確に示した功績においてやはり大切な人といわねばならない。

一九一九年二十歳であった張大千は、李瑞清・曽熙の門に入った。この師から画家の伝統をはっきりうけついだ。当時上海地区には、文雅風流の淵藪たる江南をバックにして、明清絵画が集大成されていた。あまり事情を知らない私は、昔年中国に渡り、拓本等を交易する店を開いていた人と語った時、古玩や書画の類は北京から上海に買い出し

に来るのがルールであったときいた。河井筌廬先生が戦前、雑誌『南画鑑賞』の記者に「当時上海には程霖生などという大蒐集家があった。玉石混淆とは思うが、石涛・八大山人の軸がそれぞれ五百幅はあった」と語られていたが、あながち虚構ではないと思われる。

そうした環境にあって、張大千は自らのコレクションを作った。彼が蒐集した真跡の上には、彼の各種の蔵印が捺されてあり、日本に渡来した作品の上にも広範に見られる。まま短冊の形をした〔大風堂漸江髡残雪個苦瓜墨縁〕という印が捺されてあるのを見るにつけ、彼の興味の所在を知り得る。

戦後一九五七年頃、張大千は日本に滞留して市上にあるものを色々と発掘しながら、自分のコレクションの目録『大風堂名跡』四冊を作らせた。「八大山人」・「清湘道人」の専輯が各一冊ずつある。その中の一部を売るべく、東京の壺中居で展覧したと聞いている。値段は安くなかったが、画帖くずしなどの優品は流石に引張凧で売れたそうだ。しかし贋物を作る人という芳しからぬ風評がいつからか美術商の口から出るようになって、いまでも聞くことがある。

その後、ブラジルのサンパウロに移住し、広大な園林の中で悠々自適し、八大山人や石涛の大幅に囲繞された生活を送った。旧時、彼をそこに訪れた徳大寺公英氏の詳細なレポートが『芸術新潮』昭和三十五年（一九六〇）十月号にのっている。ブラジルの後、米国に移住し、手持ちの名品を希望されるまま売り渡した。模作と思われるものも一緒に売って現在の贋作の名手張大千の風評が立つもととなっているようである。

『泰山残石楼蔵画』の中にある八大山人の名品が張大千の所有から王方宇の手元に譲渡された。今はっきりと分かっている八大山人のまとまったコレクションはここを措いてはない。

私はいま王方宇氏の手元にある《天光雲景図》と題した山水画冊を、八大山人を代表する山水画冊の一つであると

考えている。王氏に至る以前にこの画冊の所有者梁氏は、これを甚だしく愛し、自らの書齋を「天景楼」と名づけたほどである。『支那南画大成』には『泰山残石楼蔵画』より転載されている。私は数年前に渡米した時、この画冊を拝見し、年来の希望を果たした。

包世臣は、書における神品を「平和簡静、適麗天成」と形容している。この《天光雲景図》という画冊は、画の世界における神品の格付に恥じない作品である。もと日本にあり、現在ホノルル美術館にある《山水冊》とともに双璧と称すべきであろう。王方宇氏はその後、鋭意蒐集された八大山人の作品を中心にして、正確な編年の研究を完成された。素晴しい成果であると思う。

☆　☆　☆　☆

八大山人の贋作は、一体いつ頃から始まったのであろうか。漠然としてだが強くそんなことを考える。真筆には必ず贋作がつきものであるから、それを一々取り上げるのも意味のないことであると人はいうかもしれない。しかし鑑賞と研究の道をあゆみつつ何かに思い当たる時、それを記しておきたいという気持も無下にいなめない。作品の編年という正当な工作に対し、裏街道の話としても、それはそれなりに面白いことではないかと思うのである。

鄭燮の『板橋題画』に次の一章がある。

一筆石

西江萬先生、名个、能作一筆石、而石之凹凸浅深曲折肥瘦、無不畢具、八大山人之高弟子也。燮偶一学之、一晨得一十二幅、何其易乎。然運筆之妙、却在平時打點間中試弄、非可率意為也。石中亦須作数筆皴、或在石頭、或在石腰、或在石足。

僅か数行であるが、これを読んで奇異の感に打たれた。八大山人の没後に自分が八大山人の高弟だと称した人がい

たのである。こともあろうに、この姓、萬なる人は、八大山人の名に同じ「个」を称していたのである。何か納得できない気がする。率意に筆をとって、八大山人らしい筆法で石を描いたというのである。山人に画の上の弟子があったという伝承はないが、よく似た絵をかいた牛石慧という人もあるから、問題とする要素はある。日常の生活にも、伝記作家が作り上げた孤介な印象とは別のものがあったことは考えられる。南昌の人士と交遊したり、当時江西に名あり、画壇を形成していた羅牧と唱和した詩もある。

実は、程綿莊なる学者の文集に、彼の父程京萼が八大山人の貧窮しているのを見兼ねて、今までは人の取るにまかせていた八大山人の絵を、制を設けて売るようにしたという記録がある。また程京萼は黄硯旅の依頼をうけて、重金をもって八大山人に揮毫を依頼したという。その画冊が香港にある。それから八大山人も豊かになったそうである。

この様な伝承を読むと、弟子の出現は異様な感がしないではない。この記録のある乾隆の頃には、いまだに生々しい山人の消息もきかれたことであろう。次に記す張庚の『国朝画徴録』の中の記事などとともに、これらが何か仿作・贋作につながらなかったかと思うのも考え過ぎであろうか。

同じく『板橋題画』にはよく引用される一節がある。

「八大山人名満天下、石涛名不出吾揚州、何哉。」という一節である。八怪などといわれた揚州の画人の間で、その上を覆う八大の名は更に異様であり、当時すでに有名であったことを知る。

葉德輝は「張庚『国朝画徴録』以八大山人冠首、其傾倒亦云至矣」といっている。これも面白いことで、この本が編まれた乾隆五年（一七四〇）のころには、八大山人の名声はすでに四王呉惲もただならぬ人気があったことを知る。

『画徴録』の中に、

「余遊南昌、裘曰菊謂余曰、山人画筆固以簡略勝、不知其精密者尤妙絶、時人第不能多得耳。至若賈人所持贋本之最悪者、不必眼明人始能辨之。」

とあるが、山人が世を去っていくばくもたたない時代に、すでに精良な作品は入手できず、贋作が横行していた事実を土地の人が語っている。寸鉄の感あるこの一節は、よく八大山人の人気の所在を語っている。

錢塘の郝蓮は『国朝詩選』の中に山人の詩を一首選び、小伝に「鳳陽人、善書画、世高其品」と、批語に「人間贋作甚多、一見真蹟、天淵之別矣」と書いている。山人の模本は容易に作れたであろうが、いつまでも欺き通し得たものはない。

図②

図①

(一)

王方宇氏の所有になる《画魚図軸》（図①）で、《安晩冊》の一図でもよく知られている魚図の詩が題された一軸がある。

到比偏憐憔悴人、縁何花下両三旬。
定昆明在魚児放、木芍薬開金馬春。

この詩は、付炎の明遺民を風刺したのだといわれているが、末尾に「甲戌之八月廿六日画并題」としてある。謎めいたものを必ず秘めている八大山人の画から考えて、殊更に八月廿六日としたのには何かの因縁が考えさせられる作品である。

私は以前、それと同じ図柄のものがある書画書籍即売展に出陳されてあるのを見た。多くの人々はただ顔を見合せているのみで、私も又それを見て遽かには断定も為し得ず、ただその絵には八大山人らしい精気に欠けていることと、印章が模糊として定め難いのを感じて帰った。（図②）

その後、その本歌と目されるものが王方宇氏の手元にあることを知り、別に香港の開発公司で出ている『八大山人書画集』にも同巧の偽作がのっているのを知った。

またある美術商のもとで話しているついでに、

「分からないのは八大山人ですね。私の知人に八大山人をもっている人がありますが、……」

と話しかけられたので、頼んで借りて来てもらったところ、これと同じ「八月廿六日画并題」の一作であった。この幅の印章は明瞭であったが、正しいものではなかった。奇妙なことに箱は香港で仕立てられるボールに布を貼った特異なもので、白龍山人と署名された題簽は「八大山人×魚図」と書かれ、一見印刷によるようで、当初から如何わしい印象を受けた。

これで今まで見聞きしたものが、真跡の外に三幅にもなった。偽跡はひとしく印章に正確さが欠けていると覚った。これらを綜合して、この絵の真跡を臨模し、計画的に出售した一群のものと悟った。複製画の一種と見れば気も軽いかもしれないが、八大山人の作品と信じて求める人のためには実に乱真につながるのである。

この幅を前にして、私は、これは誰か王方宇の手元に至る以前にこの幅を入手した周圍の誰かがなした業であろうと考えた。八大山人は同じテーマで多くの画を描いたことであろう。しかし八月廿六日と記した同一の図を多数に描いた可能性はうすい。

図④

図③

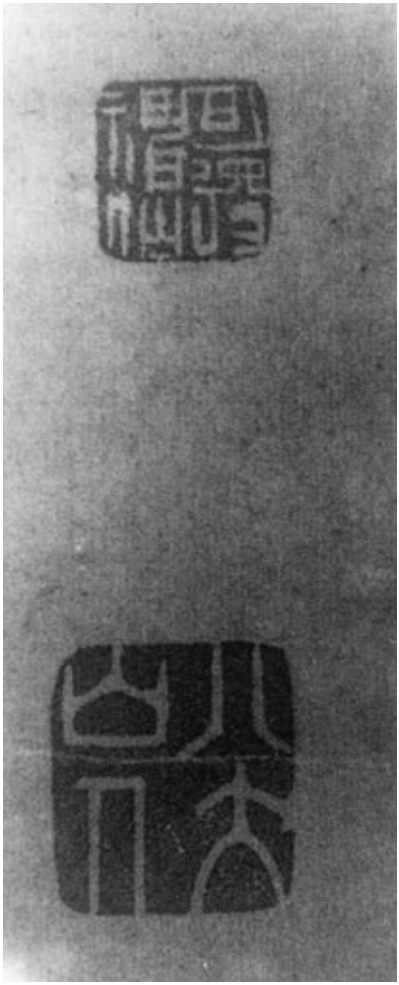
(二)

図⑥

図⑤

図⑧

図⑦



図⑩

図⑨

大正十五年（一九二六）丙寅三月、『八大山人真跡第二集』が上海美術工藝製版社から出版されている。十六点、その中に画冊八頁を含み、合計二十四頁である（私の所蔵のものは欠落三点があると思われるので或いは二十七頁）。山人の専集としては、この冊は比較的に早い出版と思われる。その三年ほどあとに、この印刷所から『泰山殘石楼蔵画』が出版され、西泠印社から出售されている。

『八大山人真跡』の印刷者は奥付によると、小林栄居という日本人であった。本郷の美術書肆柏林社古屋氏の話では「私はかつて上海に小林氏を訪ねたことがあった。氏はそれから日本に帰り、日本橋の高島屋裏通りの美術店街に出店していたが、その後消息はしらない」と語っていた。

この『真跡』はどうした資料によって作られたか分からないが、当時の上海における真偽の入りまじった美術市場を髣髴させる感がある。

『泰山殘石楼蔵画』は、高邕のコレクションである。それを唐吉生が編輯出版したものである。高邕の審定による愛蔵の書画を集めたこの画集は、八大山人や石涛の実に優れた作品を多数収容している。その中の作品は、その後にすべて散逸したが、一応蒐集品が写真によって記録され、後世に伝えられたことは、実に有意義なことではある。ただ奇妙なことに、『八大山人真跡第二集』にも収められている偽作がその中にものっている。高邕ともあろう人の目を濾過出来なかったのである。

唐吉生といえば、橋本関雪が彼の招待で西湖に船遊した折、船中で彼から清道人の遺什という画冊を見せられた。それには石涛より八大山人に宛てたかの書翰が貼られてあった。そのことは『関雪随筆』にのっている。それが色々と問題を起こした「石涛書翰」がはじめて発表された端緒である。大正十二年（一九二三）十月のことである。

さように、この『八大山人真跡』は色々と問題をもった古い画集である。素晴しい作品とともに、ひっそりと贋作

も隠している。その当時、すでに系統だった偽作が用意されていたことを知れよう。

この画集の小さな図版を見ていると、落款や印章の細部が分からず、真偽の確認は難しい。総体の感じもつかみ得ない。実物の前に佇めば、一目で贋作または模作かが分かる程の作品でも、さもよさそうに見えるのである。だが、しばらく見ているうちに何かを少しずつ感じさせる。

八大山人の真作と偽作を語るに好個な材料の一つとして面白い話もあるので語りつぐ。先ず『八大山人真跡第二集』の内容を目次によって記述する。

(1)松
(2)石上の二匹の猫
(3)仿天池道人荷花
(4)江上秋風（蘆雁）
(5)草書
(6)仿董北苑山水
(7)巨石と竹
(8)画冊（雀・山水五幅・鰤魚・書）
(9)蘆雁
(10)松と二羽の鶴
(11)長江万里図
(12)芭蕉と鳥

⒀鹿
⒁書（盤谷序）
⒂草書
⒃桃と双禽

まず現存する秀れた作品を上げよう。

⑶の《仿天池道人荷花図軸》は、現在ボストン美術館にある。曽熙の題記がある。これに押されている楕圓型の印章は珍らしい。極く僅かしか見られない。この印の押された作品の系譜をもっと調べたいと思っている。それは現在見る限りでは、偽作と思われる作品の上に、この印形を模したものが多く用いられているからである。

私はかつて一九四〇年頃に漢口で巨魚の大幅を見た。それには次の詩が題してあった。

夜窓賓主話、秋浦鱅魚肥。
配飲無銭買、思将画換帰。

即興的に身辺をよんだこのように分かりやすい詩は山人には極めて珍らしい。龍科宝の『八大山人画記』という伝記の中に、山人は魚をくれた人に画を描いて贈ったということが書いてある。相符するものがあるのを珍らしいと思った。素晴らしく澄んだ文字はまぎれもなく山人のものであるが、その中に押されたこの楕圓型の印は、はじめて見るので、それから以後久しく間怪訝に思っていた。

永い間疑問を抱きつづけていたが、ボストン美術館にあるこの荷花図上に、この印が押されてあるのを見てびっくりした。

この絵を壬申の年、六十七歳前後の作品であろうと審定した人がある。さすれば、上海博物館に己巳六十四歳の《魚鴨図巻》がある。年少時に見たかの巨魚図には、この《魚鴨図巻》に似た共通の風貌があったのを思い出す。この印とこの詩の出現した時代を六十四歳前後と想定して見ることができるのではないか。

(6)の《仿董北苑山水軸》。この軸は龐虚齋『名画続録』に記載がある。褾辺に呉雲の題記がある。癸未（一七〇三年）七十八歳の晩年の作品で、枯淡な傾向にある風趣は董源よりもむしろ董其昌を思わせる。八大山人は董其昌の山水を手本とした。三者に画風の伝承があるから、ここに「八大山人臨」とはっきり記されてあることは納得できる。

(8)の《山水鳥魚冊》。現在蘇州博物館にある佳品である。末尾の「世説二十首之一」と題された詩の一頁は、見るも美しい小楷である。私には何か、王献之の《洛神賦断翰》を思わせるように感じられる。形と情において備った美しさをしみじみと感じさせる。

この詩のことについては、饒宗頤教授の『八大山人世説詩解』（新亜書院学術年刊第十七期、一九七五年九月）があり、諒解すれば頗る面白い境地に遊べる。

次いで目に付くのは、この画冊の中の不良な作品である。

(1)松（図③）

どうもこの《松》は冒頭ながら怪しい。土坡の細点は、三十四歳の《伝綮画冊》の中の《石図》に見ることができるが、晩年の作品には決して無い。絵のすべてがおかしい。落款も悪い。最近、美術クラブに入札品として出品された《鶏図》（図④）にも散点の土がかかれている（図⑤）。偶然に似ているので例示したが、これは同一人の手に成るものではない。

⑷蘆雁図

《江上秋風》と目録にある。後述する。

⑾長江万里図

香港版『芸苑遺珍』に掲載されているので、後述する。

⑿芭蕉と鳥（図⑥）

一見して、すぐに看破出来る程に拙劣な作品である。

⒀鹿

山人に鹿を描いた傑作《群鹿図》があるが、この手の鹿はよくない。

私は数年前、中国の古画の蒐集千幅を超えると自称する、ある美術商を訪れた。「今は八大山人のものはないが、いけないものが一幅ある」というのを強いて拝見した。それが⑷の《蘆雁図》（図⑦）であった。実に巨大な画幅で、天井から掛けてなお下に曳きづっていた。見事な筆勢である。『八大山人真跡第二集』の小さな図版で見てもよく出来ていると思ったが、実物も見劣りしない。いわゆるその精なるものかもしれない。これまで、この絵は画集の中で見ただけであった。しかし実物に接すると、かなりの出来であり、私はこの業者の言を一応は疑い、充分に研究の必要があると思った。名古屋の服部有恒という画家の遺品であるそうだ。

蘆雁は八大山人が晩年によく描いた画題であったらしく、図版にまま見ることが出来る。この幅の筆の運びは豪爽で墨色の染暈もすばらしい。ただ画集でこの図を見たときも、又この実物に接してからも考えたことは、この鳥にはあの山人の神気溢れるものが見出せないことであった。総体の構図から受ける印象は、蔣廷錫の密画の蘆雁を連想させるような、月並のものである。その筆勢のすばらしさには感じ入りその業者と一緒にしげしげと見直した。

たまたま携えていたカメラで落款を撮り、冷静になって調べて見た。白文〔八大山人〕印はほとんど真物に近い程度によく出来ているが、明らかに模刻であることを知った。真正な〔八大山人〕印は実に温潤な相好をもっているのに、この印は白々しく、冷酷な感じである。明らかに模刻である（図⑧⑨⑩）。しかしこれだけの巧妙な偽作が行われていることには注意しなければいけない。

図⑬A

図⑫A

図⑪A

(三)

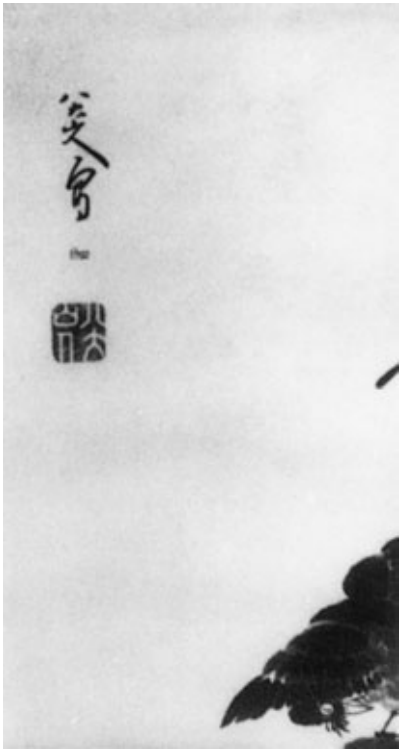
図⑬B

図⑫B

図⑪B

図⑮

図⑭



図⑰

図⑯

記述が前後するが、『八大山人真跡第二集』に先だつ数年前に『第一集』が出ている。この画集には、各々所蔵者がのっている。

大幅

(1)魚鳥と寿石　唐吉生蔵
(2)草書軸　清道人蔵
(3)荷花小禽　小林栄居蔵

半紙

(4)仿倪雲林山水　唐吉生蔵
(5)喜報三元図　仝右。趙之謙旧蔵。高邕題。
(6)草書　清道人蔵
(7)巨石叭叭鳥　高聾公蔵
(8)芭蕉石　唐吉生蔵
(9)松石双禽　幡生弾次郎蔵
(10)行書　清道人蔵

画冊

(11)山水花鳥二十幅冊　俞宜常蔵
(12)書画対題二十幅冊　唐吉生蔵

この『真跡第一集』には、一見したところあまり疑いのあるものがないようだが、ただ二人の日本人がもっている

(3)の《荷花小禽》と(9)の《松石双禽》は疑問があると気がついた。

《荷花小禽》（図⑪A）はかように小さな図版では、はっきり断定することはむずかしい。小禽の眼郭の描き方に腑が落ちないものが感じられるが、一見してよく出来た典型的な八大山人の秀作のように見受けられる。

しかし乍ら、真跡第二集の《蘆雁図》を贋作と認めた眼には、この《荷花小禽》も又非常におかしいものだと感じ出した。印章もこの小さな図版では確たる定め手にならぬであろうが、偽刻たる特徴を見ることができる（図⑪B）。そうして見ると不思議にその偽作の系列が浮かび上がって来るのである。

『泰山残石楼蔵画』にも第二帙の中に同一の構図になる《荷花図》がある（図⑫AB）。

さらに後に問題とする聚楽社の『八大山人名画譜』の中にもこれらと同一系統の疑わしい作が一幅あるようだ。落款の形が同一系統である（図⑬AB）。

これらはひとしく、一見して八大山人の荷花図として典型的な印象を受けるけれども、すべて同一構図から出ており、類形的な作為の跡が認められる。

(9)《松石双禽図》（図⑭）は、落款の様式（図⑮）から判断すると、早期の作のようである。或いは戊辰六十四歳の頃に該当しようか。この頃はまだ〔何園〕印は出現していなかったと思われる。〔八大山人〕白文印は、小さな図版では分からないが、模刻の感がある。鳥の描き方に不審さがはっきりと現われている。そのほかにもすべてに技法が稚拙で、その点からも疑うべきである。若しこの作を基準に考える人があったら、八大山人を凡庸な作家として評することにしかならない。

その他にも、第一集・第二集を通じ、なお不明瞭な作品はある。第一集にある二冊の画冊についても、「同一の手の作を北京の故宮で見た。奇怪なことだ」と語っていた王方宇氏の言を思い出す。

「八大山人製」とする山水四幅対が泰山残石楼にある。絹本らしく模糊としている。最近米国のコレクターの四幅対山水が中央公論社の『文人画粋編』第六巻にのった。別に日本国内でも所蔵される作がある。このシリーズの存在には充分に検討しなくてはならない。山人を仮托するに安易な画題であるといわねばならない。

いま、《荷花小禽図》の一連の贋作を列記して、その疑問の点を記述した。その落款と同巧なるものに、『宋元明清名画大観』の内にある方薬雨氏旧蔵の作品がある（図⑯⑰）。図版を知るのみで印章を徴すべきもなくて、唐突な感を免れないが、厳正にこれを真作と判定可能であろうか。北京の故宮博物院に癸未の年の作になる《枯柳鴝鵒図》がある。方薬雨氏の蔵品は、この図の鳥を取り出して来て崖竹を加えた印象を受ける。

図⑲A

図⑱A

（四）

図⑲B

図⑱B

図⑳

図㉑

図㉒

図㉑款記

『泰山残石楼蔵画』第四帙に、柳におかしなかっこうで止まっている鳥の絵がある（図⑱A）。如何ように見てもこの作品には不自然な印象を受ける。

その鳥と同じ図様の作が、三彩社から季刊されている雑誌『古美術』昭和四十八年（一九七三）四十三号に発表された一冊の八大山人画冊の中にのっている（図⑲A）。この画冊の一枚に「戊寅夏日」と署した山水画があるので、これを仮に「戊寅画冊」と呼ぼう。ある研究家はこの画冊を真贋二種類のものが合冊されていると語っていた。事実、この画冊には二種類の〔可得神仙〕という白文印が併存している。そして、その悪い方の印（図⑲B）が、この不自然なかっこうをしている鳥の図に捺されている（図⑱B）。

また戊寅画冊には翡翠の絵がある（図⑳）。荷花の図がある（図㉑図㉒）。ひとしく贋作であろう。その鳥の姿が北京故宮博物院にある鳥とよく似ている。故宮の作品を不良とするのは早計であろう。むしろ戊寅画冊のその一作の方が良く真を逐った作と思うべきであろう。

戊寅画冊の中に書が一頁挟まれている。いかにも自信をもった筆の運びだ。

しかし、この作は司馬温公光の語を認めている。八大山人の思想と司馬光は結びつかない。一見して違和感を免れなかった。熟視するに、その〔可得神仙〕は偽印である。偽画を試みる人は、跋文とか書にまで偽作造りを及ぼすことは少ないであろう。世上には八大山人の書軸や尺牘などに尠なからず偽跡があるといわれている。書は、この司馬光の語の作のように、馬脚を露わしやすいもので、偽作者が余り手を出さないのが常識である。

かくの如く、この作は堂々たる書の一頁であり、たじろく処のない筆勢は見事である。しかし一見その異を疑わせ、再視してはじめて偽を悟った次第である。

真があり、贋が発生して、二冊が合冊したということは、旧時の行為に属するであろう。

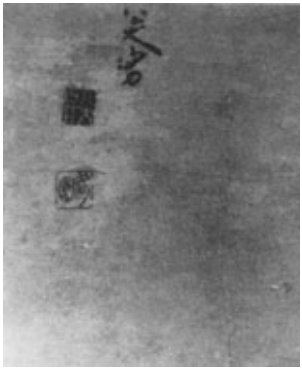
図㉓款記

図㉓

（五）

図㉖

図㉕



図㉕款記

図㉔

図㉔款記

図㉗A

図㉗B

図㉙

図㉘A

図㉘B

以上の上海版に引きつづき、日本でも南画ブームの傾向をうけて、昭和十五年（一九四〇）聚楽社から『八大山人名画譜』が出版された。画集に収録された八大山人の画は、その全作品から見れば、実に極々の一部分に過ぎないであろう。しかし、当時日本に来ていた名品を網羅し、立派な印刷をもって作られたこの画集は、研究者に八大山人の藝術の一端を示し、ついで全体を知る足掛りとなった。実に有意義な編輯であった。

しかしその中にも、観者を迷わす、少なからぬ贋物がひそんでいた。

(1)梅鷲図（図㉓）

一見して贋作であることを思わせる作品である。この作は程琦の『萱暉堂書画録』にも収録されている。

(2)荷花水禽図（図㉔）

桜木俊一旧蔵。精良な作品に見えるが、この画風・構図・筆法は八大山人の作とは認められない。

この作品の運筆の法に共通するものを感じさせ、かつ落款に同一の癖が認められるものに、次の絵があることを知った。

大正十五年（一九二六）刊、小野華堂編『支那名画集』の中にある《瓶花図》（図㉕）のそれである。この二幅は同じ偽作者の手になったものと思う。筆意は精緻である。山人の作品にも端麗にして精緻を感じさせる筆意の作があるが、それとは又別趣である。私はこの双方の絵にみられる構図とか筆法に、華麗で円熟した質を感ずる。そして、その特徴はもっと時代の下った光緒頃の技術に他ならない。

この絵はたしか小野氏の蒐集のもので、日本にあり、今も存するかもしれない。印章に徴すべきものがなく言及できないのは残念だが、私はこの絵からは八大山人の人格をのぞきみることが出来ない。岸田劉生は小野華堂から支那画を買ったらしい。『劉生絵日記』の中に出て来る。当時日本に運び込まれた雑然とした支那画の流れに、多くの人

は目を輝やかし、真贋も分からぬままに対応した。王方宇氏の所有になる山水の秀作軸に、この幅と同じ手の筆致の落款を見る（図㉖）。この手の款記が山人の執筆に間違いがなければ、山人の画法をもう一度見直ししなくてはならない。

(3)芭蕉小禽図（図㉗A）

長尾欣弥旧蔵。贋作。「壬申之重陽渉事」（図㉗B）の記がある。

(4)菊花小禽図（図㉘A）

武居巧旧蔵。贋作。「壬申七月既望渉事」（図㉘B）とある。

(5)竹石花鳥冊（図㉙）

名古屋横井済蔵。小型な豆画冊と呼ばれるものである。画法・印章ともに粗雑であり実に論外の作である。種本があるかもしれない。市場に出たが、人の注意するところにはならなかったときく。

(6)荷鷺図

児玉喜助蔵。『八大山人真跡』第一集の《荷花小禽》（図⑪A）や『泰山残石楼蔵画』第二帙の《荷花小禽》（図⑫A）の贋作と同一の手になるものとして插図はすでに前出した。

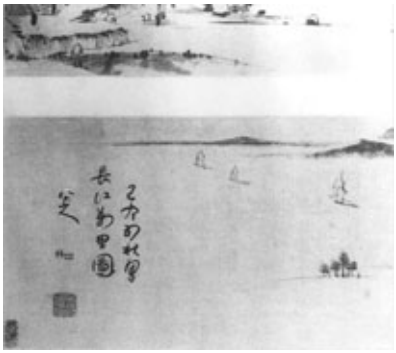
これらは図⑦の《蘆雁図》（《江上秋風図》）から敷衍して作られた贋鼎であり、不良なることが分明になった。これらはすべて大正の初年から昭和にかけて、一時のブームにのって支那からしかつめらしい顔をして、日本に上陸した替玉のグループである。

この『八大山人名画譜』にある荷花の大幅は奇妙に全部真を置けない。

総点数二十三件の内、ここに取り上げた六点は確実にいけない。印刷の図版は実際の極め手とはならないし、児島

氏旧蔵の荷花の如く、なお検討の余地があるものもある。その他の作品も疑問を残しており、なお二、三点偽作が出る可能性もある。

図㉛A



図㉛B

（六）

図㉚A

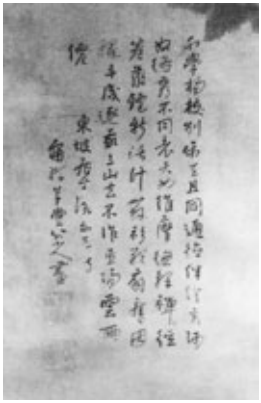
図㉚B

図㉜A

図㉜B

図㉝A

図㉝C



図㉝B

香港の開発公司から、『八大山人書画集』が上下二冊大型本で出ている。これは在来の図版の単純なる孫引であるから、言及する必要はなかろう。『藝苑遺珍』の第四輯『清初三僧』は一応新出のもので編輯されていると思われる。なかに、八大山人の作が六点ある。(1)《東坡朝雲図》、(2)《山水》、(3)《松鹿図》、(4)《墨荷図》、(5)《写生十二頁冊》、(6)《長江万里図》である。

(5)写生十二頁冊

辛巳（一七〇一）の年記のある、一見よく出来た画冊である。台北の故宮博物院に寄託されている。旅行者のみやげにとして、複製も売りに出されている。

冒頭に大字で「渉事」と題し、一匹の魚が描かれ、〔八大山人〕の白文印がある（図㉚A）。この印がいけない。この冊子は草画風で、余りにもよく出来ているので、それが八大山人の筆だといわれると、多くの人はその上に八大山人のイメージを立ててしまいそうである。アメリカにもこれとよく似たスタイルの絵がある。これ等の作は非常によく出来ているが、印記に問題がある作と作風が近い。私共はもう一度、目をひらいて見なくてはならない。

(6)長江万里図（図㉛A）

華麗で潤いのある作品に見えるが、匠気が一面に漲っている。結局は八大山人の影像が漸々として遠のきはじめ、ついには画面から消え去ってしまいそうな印象を受ける。

感覚を主とした鑑賞であり、分析が非常に曖昧ではあるが、「己卯初秋写長江万里図」（図㉛B）と書かれた文字は山人七十四歳（一六六九年）の筆跡の癖として別人のものだといいたい。

この画は、別に『八大山人真跡』第二集にも載っている。よく見ると別本の可能性があるという。ここにも同じ図柄が二点ある。いずれが真か、或いは双方とも創作か、〔可得神仙〕や〔遥属〕の二印が一目にして語ってくれる。

しかし、図が小さく分明でない。原作品の精査が必要である。看者は黙して語らぬのであろうか。

(1)東坡朝雲図（図㉜A）

山人唯一の人物画といわれ、誰となくその言の端にのせる作品である。面白い画題で、八大山人にこうした画もあってもよいのではないか、と空想する人の所産とも考えられる。

筆跡・印章・絵の状況を目のあたりに見る機会もないので、結局断定できない。題詩（図㉜B）は蘇東坡の作である。文字の癖・草体の略し方は、八大山人の書をよく研究した結果であると思われる。八大山人自身に成り切って書く行為は、八大山人以外の人には出来ない。その事実を観者に一目で覚らせるのではないか。

シンガポールに同図をたて型にしたものがあると聞き、その写真を入手した。絵（図㉝A）と書（図㉝B）は前作と同じものであった。印章もそこそこに出来ているが、原寸に近く撮影された印影（図㉝C）を見ると、偽印であると認定せざるを得ない。

この両東坡図は筆致が似ていない。両者は別人の手になったのであろう。この作には原来、本歌と称すべき図柄の作があったかどうか。或いは全くの創作なのか、想定も出来ない。こうした点は《大滌草堂図》にも、似たような問題をはらみ、更に考究すべきだ。本人に化けた老狐が黙然として坐している無気味さがある。

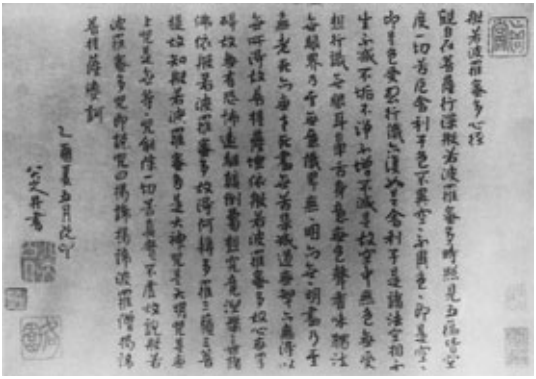
(2)山水図

款記を見た限りでは信を措き難い。

(3)松鹿図

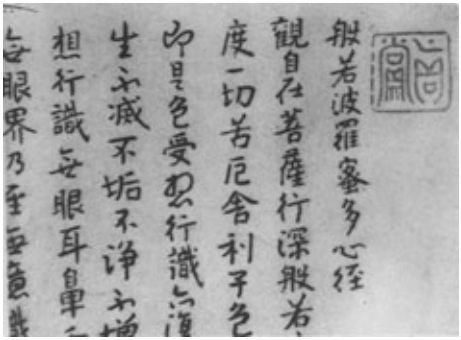
この手のものには偽作が頗る多い。印刷物を見た限りではよくない。

この画集の中で、八大山人の真跡とすべきは現在台湾の蘭千山館にある《墨荷図》のみである。

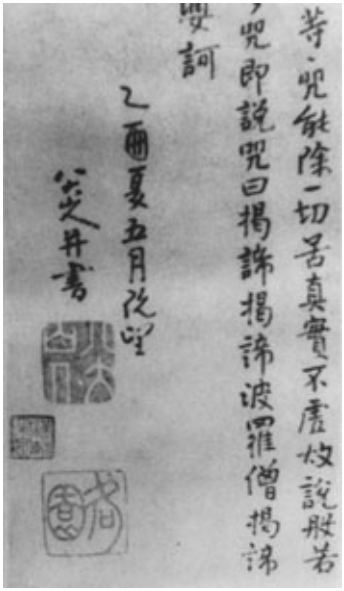


（七）

図㉞A



図㉞B



図㉞C

八大山人唯一の人物画と称される《東坡朝雲図》を引き合いに、もう一件、異質の作品を考えて見たい。有正書局から印影本が出ている焦山定慧寺が蔵する《応真渡海図》がそれである。朱省齋は『藝苑談往』に、「字千真万確、毫無疑義、画則未敢妄断其真偽」といっている。朱氏のいう「画」とは勿論《応真渡海図》のことであるが、「字」はすなわち《渡海図》の後に書写された『般若心経』（図㉞A）のことを指す。

《鬼子母神図巻》のような、細密な、仏画とも戯画ともつかぬ画をかいた石涛ならいざしらず、こうした絵が八大山人の手に成るとは到底考えられない。

また『般若心経』の末尾に「乙酉夏五月既望、八大山人并書」（図㉞C）とあるのは殊更におかしい。画は別人の手と考えられるが、書のみを問題としても、「并びに書す」の用語は、凡ゆるものを「偽」の方に覆えす。ここにも山人の文字の癖を充分に模倣することの出来る人がいたことを知る。「酉」の字はことに山人最晩年の乙酉（一七〇五）の款記によく見る書き癖である。しかし八大山人の晩年の文字に多少なりとも興味をもつ人ならば、この文字は万々八大山人の書き癖ではないと言うだろう。

「八大山人」の款記もいけない。さらに冒頭にある〔真賞〕の朱文印（図㉞B）や末尾の〔八大山人〕の白文印と〔何園〕の朱文印（図㉞C）のすべてに、模刻の影が見出せることに気付くであろう。

この画と文字の拙劣さに比して、後に続く跋文は夥しい。後世の文化人を網羅した感がある。

晩年の八大山人、そして、亡くなってからの八大山人は、何とはなく、その画業によってよりは、一人の偉大なる、そして不可思議な人物として、有名になったのではないだろうか。それ故に、《東坡朝雲図》とか、《応真渡海図》とかがでっち上げられたのではないか。彼が青雲圃に住んでいた逸話などは、どこまで信がおけるか分からない。しかし南昌に行くと、土俗の言い伝えにまでなっている。後世に伝えるその伝記にしても、画を依頼に来た人が

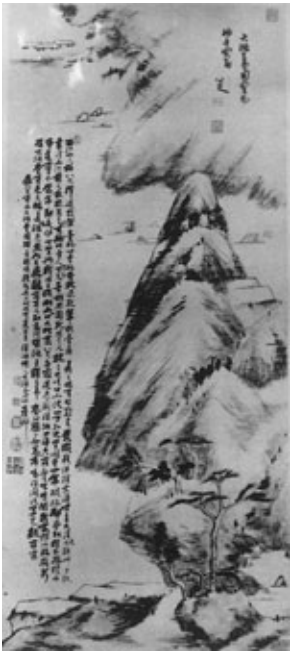
持参した絹地で、わが足袋を作らんといったなどという話は、前代の人に同じ插話がある。この話を八大山人に殊更に当てはめた感がある。世を避けて佯狂の姿勢を取る点なども必要以上に誇張された感がなくはないが、佯狂としての処世は宋元時代以来の伝統なのである。

山人は晩年、「拾得」の文字を合わせた奇妙な款記をよく使い、印章も数点存在している。自分に「拾得」の影像を見ていたのであろう。好んで不可解な印章とか、款署を用いた八大山人の行為を注目すべきである。総じて不可思議な人であるという印象がそうした些細なこととして積み上がり、いつとはしらず観者をひきつけていった事実も忘れてはならない。

山人の描画の技術は、驚くほどすぐれている。造形的に他者に見ない巧妙さがあることを、《安晩冊》などのそれを見ればはっきり分かる。造形的に玲瓏としたものを八大山人はもっていることを、真贋を見るときに忘れてはならぬ。いわゆる稚拙なものを描いた人ではない。総体として生ぶな感じがするが、筆致は精巧である。

図㊲

図㊳



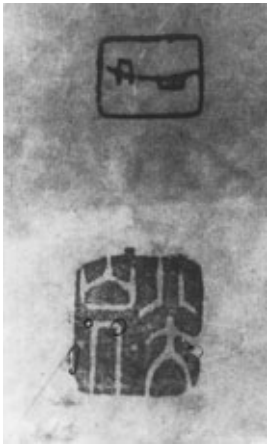
図㉟

図㊱

（八）

図㊵

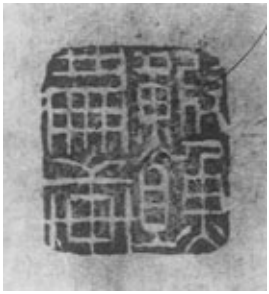
図㊷



図㊴A

図㊶

図㊸



図㊴B

図㊼

図㊺

図㊹

図㊽

図㊻

昭和十年（一九三五）、銀座の鳩居堂の楼上で、永原織治のコレクション「清朝六大画家展」が開かれ、その図録がある。その中に四点の八大山人の作品がある。八大山人が石涛のために描いた《大滌草堂図》とそれを依頼した石涛の書翰がのっている。

(1)大滌草堂図（図㉟）

八大山人の偽作問題を語る際に、最も長い論争が行われたのは、この《大滌草堂図》ではないであろうか。そして、その真贋はむしろ、その背景を成す石涛より八大山人に作画を依頼した、その手紙の真偽をもとにして争われた。

この「石涛与八大山人札」は大正十二年（一九二三）、橋本関雪が中国で見たことを書いた随筆が発端となり、永原氏の入手したものである。後日に張大千はこの手紙をアメリカのコレクターに売り込んだ。しかし、この手紙は、合計三通りあって、三通がそれぞれ文面を異にすることから騒ぎが大きくなった。

八大山人の偽作は、「甲戌八月廿六日の画魚図」のように、一つの真作を中心にして、澤山な仿作が出来ている。その現実の様相を踏まえると、この書翰が幾通あっても、それは止むを得ない。究極の問題、それの元となった実物がはたして存在していたのか。或いは全くの好事家による創作であったのかに帰着する。この手紙についての過去の論争はすべて本来の問題を離れて、末節の諸点において争っている観がある。実物に基いてことの真否を、地道に論を立てている人がいないからである。

石涛と八大山人ははたして会っているのであろうか。それを証拠だては出来ないにしても、八大山人の書画をもって、或いは又石涛の書画をもって、往来した人はいたようである。最近の研究によって、いろいろの人が、この背景を相当にくわしく解明している。

黄硯旅なる人、程京蕚という人、又は李松庵と称する人の存在が注目を集めている。石涛の手紙によれば、李松庵がことに注目されよう。李は石涛のもとより、八大山人も揮毫を依頼すべく、土産の紙を運んでいる。八大山人の住んだ南昌は、西山に紙局が設けられてあったほどに、良質の紙を多量に生産していた。にもかかわらず、石涛は揚州より江南の紙を八大山人に届けたというのである。又この《大滌草堂図》に書かれた石涛の題詩中に、程抱犢なる人も出てくるが、実在の人であったらしい。こうした内容の手紙は存在してもよいのではないかと思う。

王方宇氏のコレクションに、八大山人が描いた水仙の上に、再度にわたり石涛が題詩した作品がある。八大山人の画を入手した石涛がそれの上に好んで題詩したことは事実である。しかし必ずしも同席して書いたとは思われない。

『泰山残石楼蔵画』第二帙に、八大山人・石涛両人の合作になる《蘭竹石図》（図㊲㊳）がある。これに題された石涛の詩は、汪繹編する『大滌子題画』の中にあるものと語句に多少の相異がある。この様な手の作品は数本あったことが想像され、少しく創作臭も感じられる。この画の態様などは、石涛と王石谷の合作の《風竹図》制作の状況を考えるとき、両人の席書の趣がないとはいえない。しかし人を介して交際し、文通したことは事実であろう。

永原氏は大連で小児科の医院を開いていた。《大滌草堂図》と石涛の書翰は、きくところでは大正末年（一九二五年頃）に大連の大毎館なるところで行われた展示即売会で見い出した。永原氏はその幅を大層気に入って、毎日見に行ったが、ある人に買われてしまった。それを業者を介して数ケ月後に入手したという。そのときに石涛の手紙もついているのを知った。永原氏はこう記している。戦後、永原氏が帰国した際に、軸木を外してもって来た。原装は廻りが裰子で褾装され、天地には蜀江錦が用いられ、軸は象牙であったという。

戦前、鳩居堂で展示されてから、この手紙は珍品として賞翫されて来た。しかし『大風堂名跡』の『清湘老人専輯』に別の手の書翰が出現するに及び、その真偽いずれかという問題が発生し、学界は永原氏蔵を贋作として論断し

た。永原氏は老齢に及び、そのことを大いに気にかけつつ逝った。今にして考えると、その全部が贋作というべきであった。

私は数次、《大滌草堂図》を眼の前に見て実に判断に迷った。もし真筆と見れば、なるほど、款記の筆跡に八大山人の筆癖が非常によく出ている。「八大山人」と款署された文字が、それが作られた年代の型式によく合致している。しかし確信を持って言えなのだが、この草堂図の書は八大山人の本当の顔ではないという印象が強い。

それ等の草体の文字は余りにも真筆に近い。はっきり贋作と決め難く、心から迷った。

これ等に捺された三个の印（図㊴ＡＢ）を審定してみたい。白文の〔八大山人〕印は常用のものではあるが、明瞭に捺されている割には、細かな特徴のあるところで真を失っている。有郭の「[illegible]」印はほぼ正しいが、厘毫の差があるようである。

なお凝然とした疑問がとけずにいて、ある人に諮ったところ、印は白文の場合に、摩耗を嫌って浚（さら）うこともあると言われた。しかし、どうもそれ以降の作品に捺された印とも異なるようである。最近、その他の例が出て来たことから、その印が偽印であることが判明した。長年月の間、真を称え、偽を疑われなかった作品も、馬脚を露わした感を免れない。

いま仮りに、この画は別に真跡があって、それの仿模の作と仮定してみる。

石涛の題詩の末尾に、「大滌子済山僧」とあるのはおかしい、と指摘した人がいた。そう自署したときにはすでに、石涛は「大滌子」と自らを称し、還俗し揚州に住していたとされる。それが何故に「済山僧」と併せ称することがあろうかと、疑問を抱くのである。こうした張冠李戴の現象をどう解釋したらよいのであろうか。

もしここに純粋に八大山人と石涛の合作があったならば、もっと素直な内容で、しゃきっとした作品が想定されそ

うだ。この作品が偽作された背景には、非常によく八大山人の書画を理解し、交遊関係にも通暁した戯作者が存在したように思う。その人の影絵のようなものをこの作から感じる。

台湾の学者諸士が、張大千を囲んで、臆面もなく、永原蔵の《大滌草堂図》の由来を問うたとき、彼は自らの弱年の折の戯れであるといったときく。

橋本関雪が唐吉生より石涛書翰を示されたのは大正十二年（一九二三）である。永原氏が、これを入手したのは大正末年として、殆んど同時期であり、張大千の二十六歳頃にあたる。張大千が曽熙及び李端清の門を叩いてから久しからぬ時期である。それにしては、この《大滌草堂図》は老蒼として古色を湛えている。或いは、張大千が入門する以前から、すでにその一門に盛んに翰墨遊戯が行われていたのかもしれない。日本にはもう一点図柄が同一な《大滌草堂図》がある。款記は永原氏のものと似ているが、絵もまずく、書も拙い。同一人の手に出るものではないと思われる。しかし、それに捺された〔八大山人〕の白文印は同一のものではないかと思われる。幸い印影の徴すべきものがある。

《東坡朝雲図》も異作があって、多少図柄を異にして、別人の手跡であることも分かる。面白い対比だと思う。

この《大滌草堂図》に〔長州徐氏澹園蔵金石書画印〕という蔵印がある。これは徐乾学のことかと思う。彼はこの画の作られた戊寅の年（一六九八）より五年以前の一六九四年に死亡している。子孫は無頼であったという。年代に錯倒がある。別に〔平齋審定〕の小さな印がある。呉雲平齋の印であるが、偽作者が呉雲を引っぱり出したにすぎない。

また、この《草堂図》に捺された〔八大山人〕の白文印は、次に述べる《平遠山水図》に関連があることも記さねばならない。

(2)平遠山水図（図㊵）

落款に「丙子夏日写」（図㊶）とある。その様式がほぼ年代に合致しているので、唯一の真作かと思っていた。永原氏が大連から引き揚げて来てから、公使をしていた須磨弥吉郎氏の紹介とかで、ある人に譲渡したと語っていた。実物の無いのを残念に思っていた。

中央公論社より出版になる『文人画粋編』第六巻『八大山人』の中に、《仿倪瓚山水》（図㊷）として紹介されている一幅の山水画と、この《平遠山水図》がほぼ同図柄であるに気がついた。この平遠山水を骨子にして、中間に点景を加えた構図である。アメリカの某氏の所蔵であるときく。ほぼ原寸に近い印章の図版から、それに捺されてある〔八大山人〕の白文印（図㊸）は《大滌草堂図》に捺された印（図㊱）と同一のものであることが分かった。この《平遠山水図》の上にも同印が捺されてあったことであろう。

因みに、『藝苑遺珍』の八大山人《写生十二幅冊》の冒頭に捺されてある印（図㉚A）も同一のように見受けられる。

当時、大連には同一人の手になる八大山人の贋作が流れていて、それが次々に永原氏の手に入ったと考えられないこともない。

『文人画粋編』が出たついでに、その中の《三友図》（図㊹）について述べたい。この作の印章は徴すべきものがないが、落款は偽筆であり、文字も真筆でないことは衆目の一致するところである。

(3)双禽図（図㊺）

枯木の頂にいる鳥と石上の鳥が一点の何かを窺っている。この構図は、いかにも八大山人の真作らしい。ところが、この作を引き写したと思われる画の写真を、某氏所蔵であるといって持ち込んだ人がある（図㊼）。今までは、

或いは真跡の可能性があるかと思っていたこの《双禽図》も、また贋作の圏内にひきずり込まれそうである。「己卯寤歌草堂之夏日写、个相如吃」と款記し、有郭の「[illegible]」と〔八大山人〕の白文印（図㊻）が捺してある按配は《大滌草堂図》と軌を一にする。同一の偽印が贋作の上に慣用されるということは、少なからず見る例である。

(4)巨石図（図㊽）

上に大きくて、下の方が窄んだ石に花卉を描き添えた図である。「仿包山画法」としてある。陸治の画に倣ったというのである。款記を見て思い当たる年代がないが、強いていえば、七十五歳を越えた頃であろうか。

『八大山人真跡』の第二集に、同巧の画が一点ある。同じような頭の大きな石に、竹枝と簳籜が添えてある。この款記は五十歳の後期から六十歳前期と考えられる。そして、正確と思われる作品の款記名に酷似しているので、これは画集唯一の真作とも考えられる。この巨石図の二作品は年代が離れており、類似するものが無いので、ひとしく偽作だとする人がある。しばらく研究の対象としたい。

日本で明清画が愛好された大正十一、二年頃、白樺派の文士画人は八大山人・石涛に非常に興味を示した。大連に住む永原織治氏のもとに立寄った岸田劉生は親密な交歓をしている。劉生は日本に帰ってから間もなく死んだ。彼と八大山人の画のことについては別に書きたい。

長与善郎も中国に遊んだ折、やはり大連に永原氏を訪れ、石涛や八大山人などの作品を見ている。「石涛には余り感心しないが、八大山人によいものがあった。こうした辺僻な大連あたりでは却って蒐集に便利なのかもしれない」と随筆の中で述べている。

しかしこうして永原氏所蔵八大山人諸作の経緯を明るみに出して見るとき、上海で作られた偽物を運んで来る連中のための大連は穴場であり、永原氏は彼等のむなしき金の捨場に外ならかった感がある。あれほどもてはやされた蒐

集に、一点としてよいものがない。実におぞましい。永原氏の石涛には早くからよいものが無いといわれていた。八大山人もかく悪いものばかりである。ここにも明清の売れっ子大家の贋作の根の深さを思うのである。

こんなにも数多く八大山人の偽物を目にすると、それを見分けるには抽象論では成り立たない。ただ実証のみが要求される。

（九）

大正十二年七月号の『白樺』誌の口絵に、六幅の八大山人の画が載っている。この程度の愚作は論ずるに値しないと思っている。しかし、白樺派の文士画人によって集められ、柳宗悦が解説をし、終刊に近い『白樺』に発表された事実は世間の注目を集めよう。話題としても面白い。

武者小路実篤は、八大山人を崇拝し、山人の孤寂な境遇に同情した。一冊の画冊が彼の遺品として寄贈され、その記念美術館の目玉となっている。

この画冊は《安晩冊》の翌年、八大山人七十歳のときの作品である。草画風な印象を感じさせる作で、《安晩冊》の堅実な作風に比較されて偽作ではないかともいわれたが、軽やかに澄みきわまった作品である。

志賀直哉が編輯した『座右室』に、竹添履信がもっていた八大山人の《群鹿図》が発表されている。鹿を描いては比類なき名品である。随筆『竹添履信』に載っている。この作は山口喜兵衛から川端康成の手に入り、没後未亡人の手から離れた。

以上、白樺派の人々が所持した名品のことである。

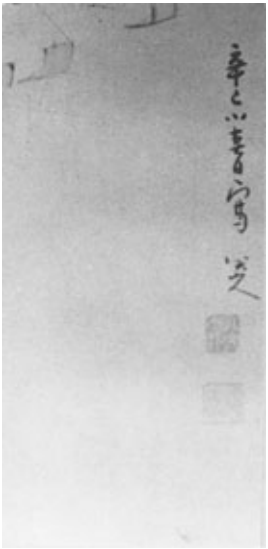
『白樺』誌の口絵になった六枚の絵は、もと一冊の画帖をくずしたものであった。「渉事」と題された一幅は岸田劉生のものである。『劉生絵日記』の大正十一年（一九二二）十一月十日の項に、谷中の高橋という業者のところで、これを含む四幅の八大山人を見て感心している。劉生は筆まめで、そうした記録を克明に記していて、且つ面白い。志賀直哉に宛てた同年十一月十六日の葉書で、そのいきさつを書いたものが残っている。又私は、劉生が木村荘八に

送った葉書に、この幅の図柄を写し、八大山人を入手したから見に来るように、と慫慂しているものを見た。翌年の大正十二年三月八日付である。その図の左下にかねて興味をもっていた楕円型の〔八大山人〕印があったので、ここにも実証があると思い、この画の実物の所在をつきとめたいと思った。その後、『白樺』誌を見ることを得て、目的を達するにつれて、それらが偽作であることを知り落胆した。

劉生の日記では、「高橋氏のところで唐画をみる」と插画があって、「終りに八大山人が四幅出たが、これには参ってしまふ。今迄の八大山人といふものの考とまるでちがった。しかしそれでいて、今迄写真や何かでみた感じとは違はないものだが、実に何とも云へぬいい感じだ。画帖であったらしく、皆同形の横物で、山水と兎が松にとまってゐる図が一きわよろしい。欲しくてならず竹添君にたのむ。何とかして余の手に入る事を祈るものである」と書いてある。劉生ほどの秀れた芸術家も、八大山人の偽作を見抜く鑑識眼を持たないのであろうか。最近、この軸が四本、恐らく竹添履信のもっていた分であろうが、古物商の手元に転々としているのを知った。余り人の注目するところにならなかった。

『八大山人名画譜』に載った《双鳥図》の一頁がもと劉生の手元にあったことが、志賀直哉に絵入りの葉書を送っていることから知ることが出来た。『画譜』では木版刷りの複製になっているので、真偽の確証を得ないが、むしろ佳品のようにも思われる。劉生は自らも疑い、業者のさそいもあって売り払っている。

図㊶A

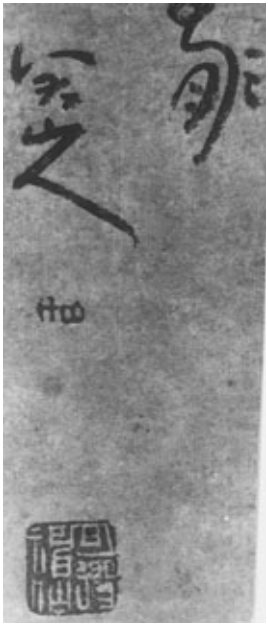


図㊿

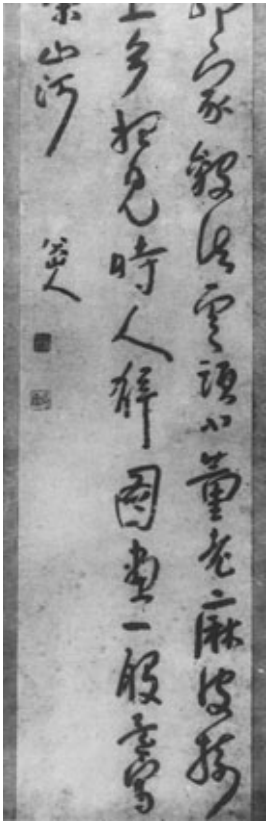
図㊾

（十）

図㊶B



図㊷



図㊸

昭和四十四年（一九六九）大阪市立美術館で「石涛八大山人揚州八怪展」がひらかれた。八大山人の作品は《安晩冊》と條幅六点が展示された。その図録によって鑑賞する。

⑴辛巳年作山水図（図㊾）

一九六五年九月、『藝術新潮』に紹介されたときは《仿石涛揚子江図》とも、今また《写大滌草堂図》とも題してあるが、いずれも根拠があるわけではない。図録の小図で見る限りでは良い作品のように思われる。しかし、筆勢に乏しく、技術が劣る。墨色が浮いている。落款もよく見ると、正しくないようだ。印章は不正確で、もしくは書き版ではないかと思われる（図㊿）。この幅は審査を待たねばならない。

⑵荷花小禽図

『橋本収蔵明清目録』にも収蔵されている。破損した絹本で、痛ましい作品だが、絵は勿論よくないし、落款・印章の甚だしく悪い作品である（図51ＡＢ）。

橋本家には《松鶴図》の素晴しい作品が一幅ある。一度これを見れば心が爽やかになる。松のよどみない線の中に、すくっと立つ鶴の姿は、山人その人の心を見る想いがする。

上に小さく「三月十九」（図52）と、崇禎皇帝が自縊した日を仕組んだ花押の如きものが書きこまれてある。この秘密は、今では話柄としてたれもが知る。しかし、山人を去ること久しからぬ時代に、丈高な作品の前に佇み、その絵を見、その人を偲び、その隠微に語りかける暗号の、奥深き意味を了解する人々がいた。今にして我々がただ漫然として、この絵を客観視するのに比して、その当時は如何に深い感銘を観者に与えたかを考えざるを得ない。世はすべて亡国の悲哀にむせび泣いていた時代であった。正しくこれは鎮魂の祈りのこめられた作品である。

後世いたずらに山人の故国に対する慕情をとくが、その理解には雲泥の差がある。隠微であるが故に、心に語りか

けるものが奥深いことを知るべきである。そして、それが後世、山人の名を高からしめた理由の一つでもあろう。

八大山人には有名な一絶がある。

郭家皴法雲頭小　董老麻皮樹上多
想見時人解図画　一峰還写宋山河（図㊸）

画事に託して、隠微に残山剰水を痛む心情を詠んだものである。一峰黄大痴公望は元の世に生きた人であるが、宋の画法で宋の山河を描いている。そして、暗に私は故国の山河を描いているその気持が分かってもらえるであろうか、と語っている。この詩を書いた書幅は大正年代日本に来ていた。いずこにか知られず保存せられていることであろう。

この《松鶴図》はもと京都の画人水田竹圃氏の旧蔵である。『八大山人真跡』第二集には、これに似た図柄で双鶴を描いたものが載っている。

(3)巨石游魚図

この幅は澄懐堂旧蔵である。「甲戌之冬日」と題されている。この図は石の点苔に気力がなかったり、遊魚の数が多いこと、補墨らしいものがあることなどからして疑問をもって語られていた。殊に山人の款記の文字が甲戌の年（一六九四）には八の字「八」の形をしているべきだとされて、市立美術館ではじめ落第点を加えていた。一匹の魚というのは《安晩冊》あたりから受けた観念であって、乙亥（一六九六）の頃になると、こうした群った魚の作品が多くなる。現に武者小路氏旧蔵の画冊、王方宇氏の扇面、クリーブランド博物館にある《巨石遊魚図》などがよい例である。八大山人は渇筆または淡墨を多く用い、濃墨を補って調子を出す書き方がある。これを補墨と感じたのかもしれない。更に「八」の字の筆法は九月頃には双方が相半ばし、年末には「八」の様になっている。理論上には良

い作品としての條件はそろっている。後は実物によって再確認するしかない。

あとがき

金岡酉三氏は、商品包装のグラビア印刷の大手「株式会社カナオカ」の創業者であり、世に知られた著名な八大山人の蒐集家でもある。金岡氏の蒐集した作品は《葡萄図》・《荷花双禽図》（二図はこの文末に掲げ、読者の観賞に供する）をはじめ、八大山人の傑作精品ばかりである。彼の八大山人に対する鑑識・鑑賞のすぐれていることを、学界では一致して認めている。

金岡氏所蔵の八大山人の《枯木双鳥図》についての彼自身のエッセーを、私が中国語訳して香港の『明報月刊』（一九七七年四月）に発表したのが縁で、交遊がはじまった。以来三十数年間、彼が二〇〇九年八十九歳でこの世を去るまでつづいたのである。この間、金岡氏と会えば勿論のこと、手紙も、電話も、すべて八大山人に関わる話ばかりであった。また金岡氏はよく二人で八大山人について語ったり、議論したものを、筆まめにメモをとり、私に送ってきていた。

ここに掲載する論文は、金岡氏が八大山人の贋作について書きのこしたノートやメモの類を、私林宏作が整理してまとめたものである。その日本語の表記・表現等に関しては、成田山書道美術館研究員西島慎一氏のお手をおかりし、ここに深謝申し上げる。また本誌『人間科学』への掲載・刊行等については金岡氏未亡人愛孝様より許諾を頂き、御礼申し上げる。

Grapevine, c. 1690.
Hanging scroll, ink on paper.
Kanaoka Yūzō Collection.

Lotus and Birds, c. 1692–94.
Hanging scroll, ink on paper.
Kanaoka Yūzō Collection.

The Fake Art of Bada Shanren

A posthumous work of KANAOKA Yuzou
Revised by HAYASHI Kousaku

Bada Shanren was a famous painter and poet in China in the seventeenth century.

This article about the fake art of Bada Shanren, was originally written by the late Mr. KANAOKA Yuzou who was the famous collector of the art of Bada Shanren.

And this manuscript was looked over, revised and edited by HAYASHI Kousaku.